学徒勤労動員

昭和十八年には初代山本校長の静岡県視学官御栄転、阪部校長の御着任があり、また、この年から、配属将校が配属され、十九年二月には始めての査閲が施行せられた。

農家への勤労奉仕も十八年から始まり、六月には麦刈、馬鈴薯掘苺畑の片付け、十一月には稲刈に、主として西宮地区へ出動した。

昭和十九年になると、戦局はいよいよ急迫し、第三学年が、五月三木の陸軍飛行場整地作業に出動し、翌六月には、学徒勤労協力に関する改正勅令案要綱が成り、六月二十六日から、芦屋中学も、三年以上が工場へ勤労動員に出動することになった。更につづいて二年生も動員となり、更に十二月には増築の完成した東校舎百五十坪を、川西航空機の学校工場とすることに決定し、学校工場は二十年六月の空襲による校舎焼失まで続いた。

学徒の勤労協力

「改正勅令案要綱」成る

学即勤労の立場に立って一年間という長期にわたって工場に、農村に挺身する学徒たちに学徒として安んじて勤労に邁進し得るための法的根拠――学徒勤労協力に関する勅令案要綱が、六日の国民総動員審議会に附議決定された。右勅令案要綱が現行の国民勤労協力令より改善強化された諸点は次の如きである。

一、従来学校報国団の出動期間は一年に六十日以内で、それ以上は本人の希望によっていたが、この勅令案要綱による学徒の勤労協力は一年以内引続いて行われることになる。

一、学徒の勤労協力は勤労即教育といふ根本的性格を明かにせしめ教職員また学徒指導員として第一線に立って体当りの指導をする。

（一九・六・七　毎日新聞）

国民勤労報国隊出動令書

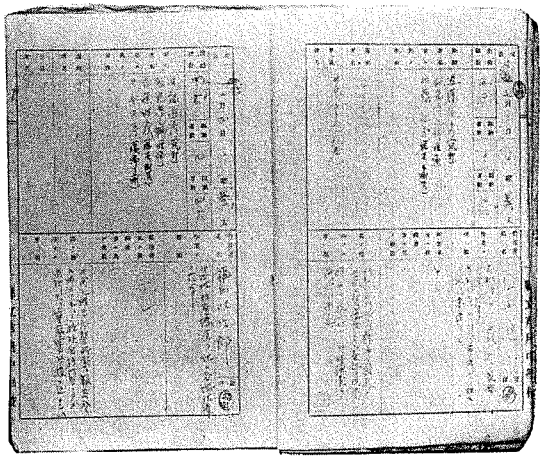
国民勤労報国隊ヲ出動スベキ者ノ職氏名　兵庫県立芦屋中学校長　阪部由松

右ノ者左ノ事項ニヨリ国民勤労報国隊ヲ出動シ之ニ依ル協力ニ関シ必要ナル措置ヲ為スベシ

隊ノ名称	兵庫県立芦屋中学校報国隊
協力セシムベキ員数	男五〇人
隊長ニ関スル事項	学校長ニ於テ適当ニ選定スルコト
銓衡ノ範囲及標準	四年適格者
隊ノ出動スベキ日時及場所	昭和十九年六月二十六日　於左記場所
協力住所	兵庫県尼崎市中浜新田字南東ノ切八九番地
申請者氏名	株式会社大阪機械製作所尼崎工場
作業指導者ノ職氏名	製罐課長　関口信雄
作業場ノ所在地及名称	兵庫県尼崎市道意字高洲割三九三番地 株式会社大阪機械製作所尼崎分工場
作業ノ内容	機械器具工業
協力期間	自昭和十九年六月二十六日　通年
支給経費	兵庫県学徒動員要項ニ依ル
災害、疾病、死亡等ニ対スル扶助ノ内容	工場法、労働法及当工場扶助規則ニ準ジ処遇スルモノトス
宿舎、保健、衛生救護施設	一、宿舎設備アリ　二、診療設備完備ス　三、月一回定例健康診断ヲ行フ　四、健康保険ニ加入セシメ共済ス

昭和十九年六月二十六日

兵庫県知事　成田一郎



勤労動員日誌

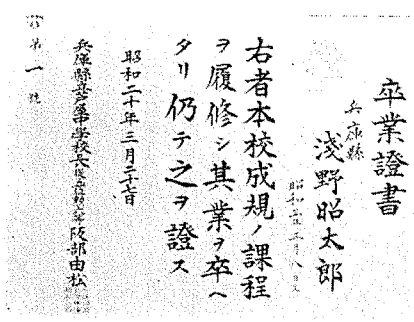
なお、勤労動員先は、次の通りであった。（六・二・三〇現在）

日東アルミ	一回生	四八名	教員一名
尼崎製鉄	〃	五四名	〃　一名（二十年二月まで）
大日本セルロイド	〃	五一名	〃　一名（二十年三月より）
久保田鉄工所	二回生	四二名	〃　一名
日本内燃機	〃	一一三名	〃　二名
大阪機械	〃	四五名	〃　一名
日本パイプ	三回生	一一三名	〃　二名
三菱軽合金	〃	一二四名	〃　二名
川西航空	四回生	二四九名	〃　五名

第一回卒業式

また、この年、中学校の修業年限が四年に短縮せられ、二十年三月には、第一回生（第五学年約一五〇名）と第二回生（第四学年約二〇〇名）が同時に卒業した。この卒業式は、打出校舎の校庭で、ゲートル着用、終始起立のままで挙行され、参列者も卒業生とその担任の教師、それに、勤労動員されなかった一年生が在校生を代表して参加しただけで、来賓は勿論のこと、父兄の参列もなく、勤労動員の附添として出動中の二、三学年関係の職員さえ参列しない、淋しい、殺風景なものであった。式歌に「海ゆかば」を歌ったのも、空前絶後というべきであろう。

なお、卒業した生徒達は



卒業證書

兵庫縣

淺野昭太郎

昭和二十年三月二十日

兵庫縣芦屋中学校長　阪部由松

第一號

右者本校成規ノ課程ヲ履修シ其業ヲ卒ヘタリ仍テ之ヲ證ス

昭和二十年三月二十日

兵庫縣芦屋中学校長　阪部由松

高等専門学校に入学した者も、高等専門学校に籍だけ置いて、引続き七月まで、現在の勤労動員先へ出動したのである。

また、昭和二十年の入学式は、式なかば、校長の勅語拝読が始まったとたんに空襲警報が発令せられ、あわてて生徒を帰し、日を改めて入学式をやり直したのであった。

アンケート

一　最も印象深かつたこと

旧職員　井上庄三郎（富山県鵜飼市居住）

一　誤った方向だったとはいえ、太平洋戦争に突入した十二月八日の朝。

二　自主、自立の出来る人の教育。

旧職員　伊藤常吉（神戸市立花園中学校長）

一　戦争中、四回生諸君を引率して川西航空機会社に動員されていたある朝、会社が爆撃されたが、門から担架で運び出される死者の中に生徒がまじっていないようにと祈りながら立ちつくしていた三十分。

二　卒業後自ら考え自ら道を切り開いて行くたのもしい社会人にみんながなってくれるような学校に。

旧職員　富永政雄（東京都在住）

一　軍需工場に動員中、生産のため生徒の生命など無視する軍需監理官と生徒達の生命を絶対に守ろうとする私との争いの数々は、私個人の歴史の上にも、芦高の歴史の上にも、国家の歴史の上にも、永遠に忘れることのできない思い出の一ページであります。

二　風光明媚、勉学の最適地日本の芦屋にそびえる芦高ですから、今後は小、中、高、大を持つ総合学園とすべきであります。またそうなることを、この東の都から希望しております。

山田恭一（第一回生）

一　岩園小学校で仮校舎生活を送っていたが、打出へ始めて新校舎が出来（今の精中）自分の机と椅子を持って一列に並んで仮校舎より新校舎へ行ったこと。

二　創立十五周年種々の変化あって今日の芦高になったが、今までは建物でいえば、地下基礎工事が出来上った所で、今後先生・生徒一体となって和気あいあいたる校風を作ってスポーツに勉学に励んでほしい。

二　芦高の将来に対する期待

校舎焼失

戦局の急迫は本土空襲をますますはげしくしてきた。三月の東京名古屋、大阪、神戸への大空襲以来、阪神間も本格的な空襲にさらされて、川西航空の学校工場となっていた本校もねらわれるであろうと予想されていた。しかし周囲に民家も少い故、あるいは逃られるかという一縷の望み――それは戦時中誰でもがもっていた、自分だけは焼けないという気持――をもったが、空からみれば、川崎の寮と共に一大軍需工場にみえたらしいことは焼失後わかったわけである。六月一日に大阪への大空襲があり、もはや神戸、阪神間は明日か明後日位かという予感は誰しもがもった。六月四日、山打出の国道の北側の小高い丘に横穴を掘ることを、誰から命令されたのか、数名の職員が実地検査に出かけた。打出のガスタンクの西側の細い道を通っていると、はるか七、八千米位の上空にB29が一機、銀翼を光らせて、丁度わが芦中の上空を東方に過ぎ去るのを見送った。何か無気味な数分間であったが、あれがまさか、翌日の本校への投弾のための偵察とは思えなかった。

空襲当日の学校日誌

六月五日（火）曇

午前六時半敵編隊空襲、多数ノ焼夷弾ハ少数ノ小型爆弾ト共ニ殆ンド全校舎ニ落下命中シ約三十分ニシテ全焼セリ、消防隊ノ活動モ及バズ。

宿直員　仲尾才彦
　　坂田健二

宿直小使　中村夫妻

仲尾氏ノ奮闘ニヨリ学籍簿、身体検査書、会計書類ヲ搬出セリ。校舎半焼程度ノ時、河野、大橋、橋詰等ノ各職員駆付ケ物象関係備品（約十点）、農具（全部）、生徒机ノ一部（約四〇）ヲ搬出ス。

倚手伝ニ比較的早ク駆付ケシ生徒左ノ如シ。

四年　竹内、入谷、三浦、吉田、奥平

三年　山崎、神戸、大内、野本、谷、山本

神戸へB29三百五十
六割、二百機を屠る
御影、芦屋、西宮にも火災

昭和20年6月6日　朝日新聞

二年　志水、山崎、奥山、桝本、中川、岩崎

午前八時半、焼跡校庭ニ全生徒及ビ一、二年主任集合（金坂、神保福永氏来校）、教頭ヨリ訓話ヲナス。

尚小型爆弾及ビ不発焼夷弾ノ周囲ニ縄又ハ囲ヒヲナシ、コレニ近ヅクコトヲ禁止ス。

午前九時ヨリ焼ケ残リニシテ未ダ消火セザル物ニ水ヲ掛ケ消火ニ努ム（一、二、三年分担区域ヲ定メテ実施）、搬出セシ書類及ビ備品ノ一部ハ三年生橋田ノ家ニ一時保管ヲ依頼ス。

学校受付ヲ設ケ、マタ植村教諭ヲシテ市役所ニ報告セシム。

午後学校長徒歩ニテ市役所及ビ県庁ニ（連絡トシテ福永氏同行）状況報告連絡サル。

午後二時生徒ハ下校セシメ、一部卒業生及ビ二年生ヲシテ跡片付ケヲナス。

芦屋市長ヲ始メ各学校及ビ出勤勤労学徒受入会社ヨリ戦災見舞者来校。

川西航空会社ヨリ昼食ムスビ寄贈、三菱軽合金会社ヨリ果汁十五本、ムスビ一箱（約四〇個）寄贈、市警察部ヨリ罹災者応急食トシテ堅パン十袋（夜勤者ニ分与）夜食用トシテムスビ約四〇個配給、職員及ビ夜勤職員生徒ニ分配ス。

夜ハ警備不寝番ヲ組織ス。

職員　午後五時―八時……岡本

八時―六日午前五時……大木、植村、仲尾、長谷川

六日午前五時―八時……富永

生徒　二年生ノ中芦屋在住ノ近距離者ヲ六班ニ分ケ二時間交代ニテ勤務セシム。

午後四時頃五年卒業生菅野友太郎（尼崎市昭和北通二七一）手伝ニ来校中、不発焼夷弾ヲイチリ爆発シテ右手首ヲ失フ。直チニ平林病院ニ戸板ニヨリテ運搬、応急手当ノ後、西宮回生病院ニ移シ（トラック）ニテ父兄ヘノ連絡ハ負傷後直チニナシ、マタ大木教諭ヲ病院ニ附添トシテ派遣ス。直接空襲ニヨリ職員、生徒ニ傷害者ナカリシ折、コノ過失ハ誠ニ遺憾ナリ。

尚一年五組山崎寛、マタ不発焼夷弾ヲ家庭ニ持帰リ、爆発シテ、両脚コブラニ重傷ヲ負フ、回生病院ニテ手当ヲナス。午後七時、教頭、回生病院ニ菅野、山崎両人ヲ見舞フ。（河野教頭記）

芦中戦災の記

五回生　岩崎　稜

昭和二十年六月五日、早朝五時頃、警戒警報のサイレンで起された私は、同じく徒歩通学生より組織された学校防衛隊の一員として早い朝食もそこそこに三十分の道を学校に駆けつけた。さわやかな初夏の朝空が快晴に輝いていた。この頃はまだ二週間前の深江爆撃を除いて警戒警報から空襲警報まで間があったが、この日はその間が特に長かった。その長さが空襲の規模の大きさの予告か、あるいは単なる偵察の単機進入を示すものか判然としなくなっていた当時手押しポンプとバケツをずらっと水道場の傍らに運び出してしまえば何の用事もなく、早朝のこととて先生の姿も見当らぬ気易さからわれわれは悪童振りを発揮して校長室へ押入った。そこで在校生全部の姓名を記すゴム印が揃った箱をみつけ、そのゴム印が押されるエンマ帳を連想した故か、悪童の一人が「こんなものさっさと焼けてしまえ」と叫んだおかしさと切実感にみんなどっと笑った。とたんに空襲警報が鳴り渡り皆は校長室から飛び出した。

宿直室のラジオが敵機数編隊の大阪湾接近を報じたので皆が運動場西南隅の防空壕周辺に陣取った。校舎中央のすぐ左側の水道場の所に消防器具が取り残されているのを見て、ふっとこれは不用意だなと思った。しかし建物から能う限り離れて防空壕を設けるのは鉄則、消火活動の能率など二次的な問題に過ぎなかった。

B29はなかなか姿を見せない。防空壕のまわりに集って敵機来襲を待つ間の不気味な退屈さ。

空襲警報になって十分以上経ったろうか、最初の編隊が南から西の空にかなり低空で悠々と姿を現わした。やがて深江辺りで黒い粒がB29の胴を離れた。爆発音を予期したが何の音もせず、爆弾で吹飛ばした後を焼夷弾で清掃とはうまく考えていやがると思う間もなく、真黒な油煙が噴き上げてくるのを望見する。北進を続けたその編隊はわれわれから遠く西北方で旋回して東へ去った。暫らく間をおいて第二の編隊が前のと同じコースから現われたが、深江上空で旋回して真直ぐわれわれに向って来る。友軍機は見えず、深江の貧弱な高射機関砲以外対空砲火もなく、甲子園一帯の対空砲火の射程外にあると思う故か、自分が真向から敵にぶっかる感覚。あっいけない、胴体中央に黒く筋のように見えるのは爆弾倉を開いているからだとあわてて鉄兜を被る。落した様子はなく頭上を過ぎるとき、爆弾倉でピカピカと稲妻のようなものが光った。落したと分ったが頭上で落したからこれは香櫨園行きだと見くびって壕へは入らず、白銀色に輝く九機が悠々と去って行くのを見送る。いつの間に子焼夷弾に分れたのか、青い筋が中空に閃いたと思う間もなく、夕立のような落下音が遠く聞えて来る。やれやれ助かったと安心する間もなく、第三の編隊が前のと全く同じコースでやって来る。東をふと振返れば香櫨園一帯はすでに煙が上っている。

緊張しきってかえって無感覚となったのか何の感情もなく青空の中の九機を見つめていると、頭上から西へ三十度、仰角にして六十度位のところで爆弾倉がピカリと光った。こいつは真上に降ってくるわいと覚悟したが、これも焼夷弾だろうから命に別条あるまいと、なおも空を見上げている。近眼の故か何も見えない、と思った途端に、何か飛び散ったように粒々が見え、青いものがちらちらして（後で分ったのだが、これは子焼夷弾の尻についている青い布片れだった）微かにザッという音がしだした。そら来たと壕に飛込み両側の入口からなるべく奥まったところに皆うずくまった。物凄い土砂降りの音そのままにザザッドシンズシンと一しきり響き渡る。爆弾ならこんな生やさしいことではすまなかったと安心し、音が止んだので外へ出ると、辺り一面真黒な油煙が掩い尽す下に赤い焔が見える。壕の上にも一本砂中にめりこんで燃えている。見渡せば運動場は一米四方に一本ずつ落ちたと思うくらい地面に突きささったり横になったりして火と煙を出した焼夷弾。その燃え方が東側ほど濃密で東校舎は黒褐色の煙に包まれて、二階の教室内部に焔がめらめらと舌を出しているのが随所に見える。

皆は壕から飛び出すや一目散に逃げて行く。私もついて走り出したが、鉄兜を壕内に忘れて来たのに気づいて取りに戻った。また敵機の音がする。東校舎はもう赤い火が勢い激しく噴き出し始めている。中央校舎は物象教室の廊あたりがちょろ〳〵燃えているだけで火も煙も見えない。西の方を見やれば何の異状もなく家並が平常の姿を見せており、南側に並んだ森は火勢盛んに燃え出した。鉄兜を

忘れたお蔭で一人残った私は無抵抗で逃げるのもいまいましい限りだと、何を思ったか鉄兜に西端の水道場で水を汲んで物象教室の廊に掛けてちょろ火を消した。その鉄兜に水を汲んでいるとき、宿直の仲尾先生が「危い、ニゲロニゲロ」と文法の時間お馴染みの独特な抑揚で言い捨てて駆け抜けていった。壕から見たとき、火も煙も物象教室以外は中央校舎には見えなかったが、近づいて見ると、あちらこちらで点々と落ちた焼夷弾を火元に燃えており、東校舎よりも被弾密度が少いので火の廻りが遅いだけということがわかった。とにかく一つ消しただけで役は果したといわんばかりの心情で、それからは私は海岸へ逃走した。学校の西側に並んだ家々の住人から「情けない子らやなあ」といわれて自分の臆病さが恥かしかったけれども、一旦逃げ出した足は止らなかった。

逃げた言訳はともかく、わが身第一と海岸で下水管にもぐりこむ用意をして形勢観望と決めこんだが、何も状況が分らない。大分様子が落着いて空襲も終ったと思った頃、学校へ戻って来ると、すでに西端の教教室を残すだけで跡形もなく焼失し去り、火はなおその残った部分を呑み込まんとしていた。駆けつけた教頭の指揮で、他の駆けつけて来た生徒達と一緒に、まだ焼けていない教室から机を運び出した。西端二階の音楽教室のピアノを運び出したかったが、われわれがその下の教室（二年一組）の机を搬出にかかっている時、すでに天井が黒く焦げ燻って来た火の廻りの早さで二階は手が出なかった。その代り西端一階の廊下にあったグライダーを数人がかりで運び出したのに、降伏後間もなく焼き捨てる運命となったのは皮肉なものである。その西端の教室の最後の柱が燃え落ちた瞬間の有様は今も鮮明な残像を眼底に残している。

父が弁当を持って自転車で迎えに来てくれたのは正午に近かったと思う。夕方まで家で眠り、夕方から整備に焼跡へ出かけた。空しく残った水道の栓をひねると湯気が噴き出るだけだった。夜になると風間は燃え尽きたと思っていた焼跡全体がそのまま残り火で真赤に燃えていたのも哀しい驚きだった。五十キロ焼夷爆弾の不発弾が二、三発運動場東部にめり込んだのに赤旗をつけて縄張りしてあるのを踏込まないようびくびくしたその宵も九時か十時頃放免されて帰宅した。

今となればよい体験だったと貴重に思う。まして運動場に転がっていた不発焼夷弾を数発束にして持帰り、信管を抜いて中味の油脂を取り出して風呂の燃料にしたら高熱過ぎて風呂の釜が抜けてしまって大目玉を食ったことなどはユーモラスな失敗といえよう。

われわれが二月末に神戸の東尻池町まで強制疎開の家潰しを手伝いに出かけ三日程潰して廻った家の材木で作った防空壕の頑丈さにも改めて感謝しておくべきであろう。それにしても最後に大黒柱を引きずり倒して家屋を潰す快味に興じていた時には、そんなことを予感だにしなかったのも事実であった。

校舎を失った芦中がどのような流浪の旅をしたかは、座談会の記録、特に阪部前校長の言が最も実感的であるが、今時日に従って経過を略記しょう。

六月五日の焼失後芦屋市より宮川小学校の本館東端の六教室を借用して、ともかくも授業をつづけた。当時一年生（五クラス）のみが授業して、二年生さえ遠兵隊へ駆り出されていたので教室はかろうじてまかなえたわけである。

六月、七月、空しい戦争末期の二ケ月の苦闘が続いて、八月に入り、広島に原爆が落された日、すなわち五日から六日未明にかけての阪神間大空襲によって、宮川小学校は焼失、僅かに本館の一階と東端を残すのみとなった。芦中は二度戦災にあったわけである。

八月十五日の降伏後、最初の職員会議は、宮川小学校の三階東端（現在の一三一号室）で行われた、全く虎脱的な廃墟の中の職員会議であった。校長は焼けた講堂背後の小室に雨が降ればそのまま、たたきつける室で、机を一つポツンと置いて頑張っていた。しかし授業は九月を待たずに開始された。九月になれば宮川小学校の児童が登校するので、芦中は四教室に限定された。しかも勤労動員から帰った全校生徒を収容することは不可能である。打出の海技専門学校の校舎を借りて九月中は授業を継続した。校長は校舎の獲得に芦屋市へ運動をしたが、岩園小学校も罹災し、到底芦中の容るる余地はなかった。幸にして父兄に本山村長、松田氏がおられたので、それにわたりをつけて、遂に本山第一小学校（二、三、四、五年）と第二小学校（一年）を借りて落ちつくことが出来たのは十月六日であった。焼け残った芦中の僅かな財産、数十の机をかついで、延々と全校生が阪神国道を本山第一小学校へ移動した。既に米軍進駐兵のジープがはげしく東西にゆきかっている歩道を机を肩に歩いていた芦中生の姿は誠に印象的であった。

アンケート

一　最も印象深かつたこと
二　芦高の将来に対する期待

河野豊治（市立兵庫高校長）

一　まだ勝報はなやかな昭和十八年の初め頃と思うが、昭南島（シンガポール）陥落の時、全校を挙げて打出神社に感激の参拝をした。正に隔世の感がある。

二　文化の薫高き天下の芦屋市を象徴する気品高いモデル・スクールになる事を期待します。

中村隆光（第二回生）

一　回答になるかどうかわかりませんが、恵まれない時代を過した私にとってよき時代としては毎放課後、野球・バレー・ラグビー・陸上競技等をやった一年生の夏休前、クラス対抗野球試合にキャプテンとしてベスト・メンバーを編成し、ホームラン等かっとばしてわが四組を優勝に導き、担任の井田先生におほめの言葉を頂いた時にしくはありません。わがクラスに三藤・杉山・奥田・波多野の諸君、他のクラスに青池・河原・山岡・山本・阪井・市原の諸君等名手が揃っていました。全国大会に出場し躍応に進んだ浅沼君をしても、私のクラスから選手として出られなかったのですから当時のレベルの程がうかがい知れると思います。但しけんこうボールを使用した敢武野球でした。

二　天下の芦屋市はブルジョア都市として期待はしませんが、天下の芦屋高校（わが母校）に対しては社会のあらゆる分野に人材を送る人間育成の場として発展することに多大の期待をし、私たち同窓生もまた努力したいと念願しております。その一つとして同窓通信のようなものを定期的に発行し、お互にむち打ちたい時期に来ていると思います。

アンケート

一　最も印象深かつたこと

上田　雄（第五回生）

一　校舎が焼けて大目玉をいただかずにすんだこと

時は打出の芦中が焼ける前日（と記憶するが或いはその数日前かも知れぬ）当日、深江方面の焼跡整理の勤労作業を体の調子が悪いため休ませてもらって数人の学友と学校で自習していた私は校庭で遊んでいる時に過って正面玄関の大きなガラスを破ってしまった。

毎日々々が恐怖の連続だった戦争中の学校で、金を出してもガラスの買えぬあの頃に、これは大変な不始末を仕出かしたものだ。しかし今更どうすることも出来ないので私は覚悟を決めて職員室へ自首しに行った。職員室には当時勇名を馳せた植村先生（生徒の奉っていた俗称はアブラ虫）がおられる筈だ。私は型通り

「二年〇組上田雄、アブラ先生に御用があって参りました」

と職員室の入口で怒鳴って瞬間ハッとした。その日は余程体も頭も調子が狂っていたらしい。戦争中の職員室で、しかも相手が植村先生であればこの言葉がどれだけの恐怖の報酬をもたらすか、当時の芦中で植村先生に親しく訓育を受けた者なら誰でも容易に想像出来るだろう。しかも私はガラス破りの大犯人である。

次の瞬間私は踵をかえして走っていた。そうして急いで荷物をまとめて家へ逃げ帰った。全くその時の気持は「後は野となれ、山となれ」という焼けくそのの気分だった。

しかし家へ帰ってもこの事件が今後どう発展するかすこぶる心配で落ち着けなかった。

ところがである。その翌日か、数日後この事件はなんらの進展もみせずに校舎の煙りと共に無事消えてしまったのである。私はこの時程空襲を有難く思ったことはなかった。そうして人知れずこの空襲に感謝し、ホッと胸をなで下したことであった。

井阪秀夫（第六回生）

一　本山から青年学校への移動。

二　伸び伸びと明るい雰囲気の学園になってもらいたい。

岡田洋一（第六回生）

一　一九四九年の四月、高二のとき、不当な圧力によって、われわれは二流先生だ、二流なるが故に諸君と別れなくてはならぬと叫んで転勤してゆかねばならなかった一流先生の送別会。

二　いつ、どんな暗い時代がこようと、自治と自由の伝統の火を高く掲げて進もうという努力をつづけてゆかれたい。

二　芦高の将来に対する期待